令和３年度大牟田市総合教育会議（第１回）　会議録

◆ 日　　時　令和３年 10 月２８日（木）14 時 00 分～14 時 55 分
◆ 場　　所　大牟田市役所北別館４階　第２会議室
◆ 出 席 者
関市長、谷本教育長、山本委員、嶋田委員、東委員、笹井委員
教育施策関係部署
（企画総務部）岡田部長
（市民協働部）中島部長、冨安副部長
（教育委員会事務局）　平河教育監、中村事務局長、総務課 平野課長、
教育みらい創造室 松葉主査、学校再編推進室 中野室長、
学校教育課 竹谷課長、松浦主査、
指導室 小宮室長、学務課 黒田課長、内野副課長、木下給食担当課長
（事務局：企画総務部総合政策課）新田課長、松尾副課長、小山
・傍　聴　者　２名

◆ 議　事
[議題]
１．大牟田市小中一貫教育制度の導入について
事務局より説明後、協議。
[意見交換]
委員　　昨年の総合教育会議の際に、制度の導入についてお願いした。１年経ってこのように具体的な方針案まで示していただき、スピード感を持って対応してくださったことをありがたく思う。

今まで大牟田の小中学校というのは、ESD の活動等を通して、地域との繋がりが深まった。今回の制度を導入することによって、説明にもあったが、地域とともにある学校づくり、そういった形で新しい取組みが始まるということも勉強になった。先ほどお言葉にあった地域学校協働活動推進員やスクールソーシャルワーカーの配置が必要になってくるが、地域学校協働活動推進員は、やはり地域との会話や、学校間の対話など、すごく大切な仕事だと思う。地域のことだけでなく学校のこともよくわかっていらっしゃるようなそういう人材が必要になってくると思うし、常勤のスクールソーシャルワーカーも重要。人件費が必要になってくるので、そういう面でもぜひ予算のバックアップをお願いしたい。

制度導入することによって、いろんなメリットがある。一番ありがたく思うのは、中学校単位でスクールソーシャルワーカーを配置すること。そうするとスクールソーシャルワーカーが常勤でそこにいてくれるというだけでも、保護者、学校にとってはありがたい支えだと思う。長期間にわたって、

小学校、中学校ずっとつながって見ていただけることが一番ここに出てくるのだと思う。今回のコロナ禍で、想像していなかったが、コロナによる不登校が増えているのが現実だと思う。今までうちの子どもはそんなことなかったのにと思う保護者も多いと思う。そういう不安を感じている児童や生徒がいつでも少しでも安心して相談できるようなためにも、スクールソーシャルワーカーの導入は絶対に必要である。そういうことを含めて、制度導入のメリットはあると思う。

ぜひ、先ほど説明があったようにモデル事業を経て、進んでいくように、予算に関しては、教育委員会にお願いしているが、協力をよろしくお願いしたい。

市長　小中教育一貫制度の方針案については、教育委員会の職員の方、学校現場のみなさんが、十分協議して、今ここまで進めてきていただいたもの。みなさんの努力で今ここまで進めてきていただいている。

それに加えて、その実効性を高めるために、地域学校協働活動推進員の配置やスクールソーシャルワーカーを中学校に配置を目指していくと話を伺っている。

スクールソーシャルワーカーは非常に人材確保が難しい。スクールソーシャルワーカーは特にいろんなところで求められていて難しい。今後、しっかり人材を探しながら、それに合った予算についても、私としてもできるだけ取り組んでいきたい。

関連して、事務局から地域学校協働活動推進員はこんな方が必要ではないかと意見があったが、何か今後想定しているものがあるか。

事務局　今、吉野小学校で学校運営協議会をモデル事業として実施している。そちらに入っている地域学校協働活動推進員は退職校長の先生に入ってもらっている。やはり学校全体、地域をよくご存じの管理職を経験された先生方が適任なのではないかと考えている。今回、宮原中学校校区での制度導入をして、地域学校協働活動推進員の選任にあたっては、学校関係者、校長先生を経験された人材を確保してやっていきたい。

市長　地域のこともよく知っていて、学校のことにも見識がある方。なかなか難しいができるだけ今進んでいる例を見ながら、各地域と教育委員会とで進めていけたら良い。

委員　保護者の立場として、制度の導入にはとても関心がある。資料の中に「中1ギャップ」という言葉がたくさん出てきたが、これは子どもたちの問題だけでなく保護者も小学校、中学校での対応の違いにはたいへん戸惑いを覚え

て、自分も子どもが感じる「中１ギャップ」の不安を経験したことがある。制度によって、児童を送りだす小学校と、迎え入れる中学校というような別々の２つの組織体制ではなく、９年間ともに子どもたちを見守り続けるという考え方を共有して、対応していただけると保護者としても、小学校と同様に気兼ねなく行くことができるようになると思う。そして、学校、家庭、地域が一緒になって地域の子どもたちを９年間見守りする制度が定着すれば、子どもたちも今以上に生き生きと学校生活が送れるのではないか。

保護者としては、市内のすべての小中学校に制度が導入されていく中で、児童生徒と保護者に加えて、地域のみなさんにも丁寧な説明を行っていただくことは大切なことだと思う。

一貫教育と言うと、校舎も一つとなった一体型をイメージする市民の方が多いと思う。身近にある学校がすっかり様変わりすると誤解する市民も多いのではないか。今の学校は、先生方と児童生徒とその保護者だけがつながっているわけではなく、制度導入の中でコミュニティ・スクールが導入されるが、すでに各学校とも地域の団体のみなさんと関係性を築いておられる。私も地域の者として、学校に行くこともある。そうなると、地域のみなさんにもより丁寧に本市の教育制度がどのように変わろうとしているか、理解をいただくことは大切だと思う。いろいろな場面で説明、PR の場面があると思うが、ぜひ制度のことを多くの市民の方に説明をお願いしたい。

市長　　地域のコミュニティ組織自体が小学校校区ごとに基本的にはできており、学校は単に子どもたちが通う教育の場だけではなく、学校単位ごとに地域がその地域を良くしていくという、さまざまな活動が行われている。そういった意味では、丁寧に各地域に制度のこと、我々が進めようとしている制度がどんな風なものなのか、しっかり説明をしていく。地域の説明状況についてはいかがか。

事務局　　地域への説明状況については、おととしから説明を行っている。今、方針案を作成中なので、これがしっかり固まり次第、また周知徹底を図っていきたい。宮原中学校校区で来年度試行していくが、リーフレットを作成して、地域や保護者等に配布していく、そういった計画を進めている。制度が固まり次第、丁寧な周知を図っていきたい。

委員　　３つ意見がある。

１つ目は、スクールソーシャルワーカーの件。先日新聞にも載っていたが、昨年度のコロナが原因による不登校の数が急増している。もう一つの要因として、2017 年に教育機会確保法という法律が制定されて、それはフリースクールなどでの学習が多く認められたということを聞いている。同じような

カーブで自殺者が増えている。メンタルケアの対策が喫緊の課題である。これに加え、最近増えているのは、ネットいじめの問題。やはり時代の流れからのもの。

スクールソーシャルワーカーはメンタルケアが必要な子どもたちにカウンセリングをして、子どもたちに寄り添って、それに加え、家庭に介入しなければならないし、また、相談も受けなければならないし、学校の先生にアドバイスもしなければならない。スクールソーシャルワーカーが担っているのはコーディネーターの役割。大牟田で４名のスクールソーシャルワーカーがいるが、今の時点でも足らない。先ほど人材の確保がなかなか難しいとの話があった。しかし現場としては、ぜひ必要なもの。しっかりお願いをしたい。

２つ目は、市長への感謝を述べたい。一つは災害の問題。去年の豪雨災害はとても甚大なもので、学校も子どもたちも被災した。今年もお盆に秋雨前線の影響あり。子どもたちはたまたま夏休みで、登下校などには影響なかった。市長をはじめ、市の対応が迅速であった。学校によってはすぐそばに川が流れている。１年でしっかり対応をとっていただいてありがたく思う。

３つ目は、新型コロナウイルス感染症対策。７月から８月にかけて、第５波は非常に大きな波であった。若い世代にも流行した。大牟田にも家庭内感染が広がり、全国では、小学校や中学校でクラスターもあった。学校での対策はしっかりされている。一つはスクールサポートスタッフという存在がある。これは、こまめにみんなが触るところを徹底的に消毒。CO２センサーの効果が見える。これから寒くなると窓をあけることができない。換気のタイミング、そういう大切な感染対策の強化を。また、蛇口のレバーをアームレバーに変えていただいたが、せっかく手を洗っても、手で触ってしまう。さまざまな協力のおかげで大牟田の子どもたちに感染はなかった。

市長　　スクールソーシャルワーカーについては、できるだけ人を確保し、学校の先生方、保健の先生方と連携していきながら、しかし家庭介入の部分はスクールソーシャルワーカーにお願いする部分。そういった形でいい形で活用をしたい。できるだけ学校現場の課題を解決する方向にしていきたい。

災害の話については、昨年度は応急対応をしてきた。河川の改修やポンプを増強するなど。一定の効果を上げたとは思うが、昨年の雨を思うとまだまだ十分ではない。引き続き取り組んでいきたい。

新型コロナウイルス感染対策については、若年層の広がりはあったが、学校内での広がりはなかったと聞いている。さまざまな機器を導入したが、教職員のみなさんが、子どもたちとしっかり感染対策をやってくださった。高い意識での感染対策をやってもらっていた。機器はもちろん必要なものだが、うまく使っていくことが大事。今後も気を引き締めて対応していく必要

があると考えている。

教育長　　スクールソーシャルワーカーについては、人材育成という重要な課題がある。一方で養護教諭との連携など先生方のスキルをあげていかなければならないと思っている。今後研究をしていきたい。新型コロナウイルス感染対策については、教職員のみなさんが必死になって対応していただき、また、スクールサポートスタッフがしっかり機能して、感染を食い止めてくれたと思って大変感謝している。

委員　　昨年の会議で GIGA スクール構想についてお話をさせていただいた。あれから 1 年、第 5 波と呼ばれるコロナの波がきたが、緊急事態宣言も解除され、教育関係の学校の行事も再開されてきた。その中でも特に学校訪問で授業参観をさせていただくと、過去と違うことが起きていた。教室では生徒たちがタブレットを使っていた。ある学校で、子どもたちが昆虫を捕まえてきて、虫かごにいれて観察をしていた。通常は、虫眼鏡で見ることが多いが、昆虫が動いてなかなか観察できない。しかし、ある子どもがタブレットのカメラで昆虫を写して、それを静止画にして拡大して観察していた。先生たちも思いつかないような使い方をしていた。とても感心した。9 月にはオンラインの予算を組んでいただいた。今、不登校については、新聞で北九州市と熊本市だったか、不登校の家と学校とでオンラインで授業を行うと出席扱いになると聞いた。テスト運用かもしれないが、一部だけどもいい方向に進んでいるとのこと。タブレットはこのようないい方向でも使えると知って、教育委員会としてもタブレットを使ってどのように進んでいくか注視している。引き続き支援をお願いしたい。

子どもたちの体験活動の提供についても、ぜひ子どもたちに本物を見せてほしい。コロナ禍で外に出る機会も減っている。三池港クルーズ、宮原坑の見学、演劇の観劇、いずれも教育委員会が主体でやっていないものでも、声かけをいただいて実現していきたい。できるだけ他の部にもお願いして、子どもたちに本物、いいものを見せてほしい。宮原坑に大正小の 6 年生が行ったと聞いた。初めて行った子どももいる。初めて行って迫力があったとのこと。そういう感動の機会が必要だと思う。

市長　　GIGA スクール、ICT 教育については、これから進んでいくと思う。しかし ICT というのは、あくまでもツールであるから、どのように使っていくかが大事だと思う。子どもたち自身が生み出すかもしれないが、それらをリードする先生たちの力が必要だと思う。教育委員会の中でも研修がなされている。若い先生たちが活躍しているとも聞いている。どう使ったら子どもたちの力を伸ばすことができるか、考えていきたい。

本物を体験するということは、子どもたちにとって大事なこと。コロナ禍でさまざまなイベントが中止されている。学校行事も縮小されている。感染対策上仕方ないこともあるが、感染状況が落ち着く中で、感染対策をしっかりしながら、市全体の取組みの中で考えていきたい。

委員　ソフトバンクの選手が野球を教えにきたりしている。教えているのは、野球をしている子どもたち。一般の子どもたちも含めて、練習をするのではなく、有名選手からいろんな話を聞いたり、体験することもいいのではないか。

市長　大牟田市が包括連携協定を結んでいる明治安田生命さんがやっている健康づくりの支援ということで、サガン鳥栖の選手、コーチに来ていただいたり、我々市長部局だけでなく、市長部局に関連がある企業団体との連携しながら子どもたちの体験教育を増やしていきたい。

委員　子どもたちは、学校行事に加えて、多様な体験をすることで生きる力が育まれると聞いている。子どもたちにとって行事や体験がどれだけ大きいものかと石丸先生もおっしゃっている。石丸先生の言葉で「大牟田市においてESD を展開していくことは、学力向上ひいては生きる力を育むためでもある。つまり、ESD 実践の延長線上には学力向上が明確に位置づけられないといけない。持続可能な社会の作り手を育むことがうたわれている学習指導要領においても ESD 実践と学力向上は拮抗対立してはいない」とあった。その後に「大牟田市における ESD は、持続可能な大牟田市の実現のためにある」という言葉をいただいた。

大牟田市の SDG s /ESD の推進について感じたことは、大牟田市がこれまで取り組んできた ESD の学びで、子どもたちは自ら考えたり、行動をしたり、さまざまな体験を通して、しっかり学ぶことの喜びを感じたと思う。その子どもたちが持てるようになった学ぶ力は、すごく広い意味での、学力と呼ばれる大きな力になっているのではないかと感じている。大牟田ではこの学ぶ力を知った子どもたちが大きくなって、小さい苗が大きく育っていくように、未来を拓く人が大牟田の教育で育っていることはとても素敵なことだと思う。SDG s /ESD の推進を応援してもらっていることを非常にうれしく思う。

市長　地域のみなさんと一緒にさまざまな課題を解決していくことは、持続可能な社会につながっている。ESD の取組みを小中一貫教育の取組の中で広げていくことも大事なことだと思う。いわゆる自尊心、自分を自ら高く感じて自分で何かをやる、その自尊心と学力は相関関係にあると言われている。自分を信じる力を持つ子どもたちが増えていることは、学びにとっても大きなこ

と。決して ESD と学力は別のものではなくて、同じ方向だと思う。

教育長　　就任当時から言っていることだが、知徳体のバランスのとれた力を育成することを目指してやっている。これまで大牟田の子どもたちは ESD を学び、心を鍛えてこられた。体力についても子ども大牟田体力検定などに取り組み、それがしっかり数値としてあらわれた。教育のまちおおむたと言うためには、数字で見る学力を向上させたいという強い思いがある。これができれば、子どもたちは授業がわかる、できるということが、自尊心につながると思う。ここは諦めず、子どもたちに力をつけてあげたいと思っている。今まさに教育現場でも一人一人、誰ひとりも取り残すことなく、力をいれてやってくということを進めている。社会総掛かりで子どもたちを育てていきたいと思っている。

以上（14:55）終了